

近江石工・西村嘉兵衛の蓮華寺燈籠と奥の院燈籠の形態的特徴と技術

A study on the features of Nishimura Kahei's Rengeji and Okunoin stone lanterns

楊 書偉* 落合 知帆** 深町 加津枝**

Shuwei YANG Chiho OCHIAI Katsue FUKAMACHI

Abstract: Stone lanterns are important components in Japanese gardens. The stone lanterns made by the three generations of stonemasons Nishimura Kahei from Meiji to the early Showa periods were well-known in Shiga and Kyoto prefectures, but no systematic research was found. This study aimed to clarify the characteristics of Kahei's lanterns and evaluate the masonry techniques with qualitative and quantitative data. We investigated Kahei's 20 Rengeji and 9 Okunoin lanterns by studying the historical sales records, interviews, and measurements surveys. Besides examining the stone materials, shape features of each part, size, proportion, and carving design and patterns were analyzed based on technical drawings. It was found that all the Rengeji were 6 Shaku with featured Kasa, Hibukuro, and Nuki, while Okunoin were in six different sizes from 5.5 Shaku to 10 Shaku with featured Hoju, Kasa, Warabite, and Hibukuro. Most Rengeji and all the Okunoin lanterns have used brownish fine granite with various designed patterns. The component proportions were highly similar within each type despite the various sizes of Okunoin. It is concluded that Kahei's lanterns were created by the pursuit of originality and high craftsmanship made possible by stone quality, a balance of proportion of each part, and exquisite carving.

Keywords: Nishimura Kahei, Stone lantern, Rengeji, Okunoin, Shiga Prefecture

キーワード: 西村嘉兵衛, 石燈籠, 蓮華寺燈籠, 奥の院燈籠, 滋賀県

1. はじめに

(1) 西村嘉兵衛と石燈籠

西村嘉兵衛(以下、嘉兵衛)は、滋賀県大津市南小松地区出身の三代にわたり名工として知られる石工である。嘉兵衛が燈籠製作に使用した彼の持山から産出される石は、比良山地の白色の粗目の花崗岩とは異なり、薄茶色がかった細粒花崗岩で独特の質感を持つ¹⁾。この石材を用い、高度な加工技術を持つ嘉兵衛が作り出した燈籠は、明治期から昭和初期にかけて滋賀県内および京都府京都市内で嘉兵衛の石燈籠として知られていた²⁾。西村嘉兵衛は三代に渡り、初代(1850-1915)は主に明治期に、二代目(1877-1936)は明治期から大正期を中心に活躍し嘉兵衛燈籠を確立したとされ、三代(1908-1990)は主に昭和初期に活動していた¹⁾。しかし、どの燈籠が何代目により製作されたかは分かっていない。

嘉兵衛の製作した石材加工品の中でも、人々の評価が最も高かったのが蓮華寺燈籠と奥の院燈籠であった³⁾。明治時代から嘉兵衛燈籠の価値は、すでに滋賀県や京都府京都市内の石材業者や造園事業者の間で広く認識され販売されていた。慶応元年創業で鈍穴流の継承者である滋賀県造園業者の近藤・山村の著書『秘伝・鈍穴流「花文」の庭』では、「嘉平が作る燈籠は細工も秀逸で最高級品とされた」と紹介され⁴⁾、高く評価されている。一方、これまでの石燈籠に関する研究では、寺院に設置された燈籠や鎌倉時代から江戸時代初期の燈籠作品が主な対象であり、写真や図絵を用いて燈籠の本歌や形態に焦点を当てた研究⁵⁾⁶⁾が行われてきた。近代の燈籠に関しては、京都で活躍した石工の燈籠作品を紹介するもの⁷⁾、石燈籠を庭園の1つの要素として燈籠を紹介するもの⁸⁾、庭燈籠の形態的特徴を捉えた研究⁹⁾¹⁰⁾など、近代から現代の庭園や私邸の庭に配置された石燈籠に関する研究は非常に限られている。また、嘉兵衛の石燈籠の価値は一部で認識されているものの、それらの燈籠を定量的および定性的に研究したものは見当たらない。

(2) 燈籠の起源

先行研究によれば、石燈籠は仏教の文脈から始まり、仏教の広ま

りと共に日本に導入されたとされる⁶⁾。燈籠はもともと純粹に火を灯すための道具として寺院の前に置かれていた¹¹⁾。その後、利休の時代に茶庭に導入され、茶道の繁栄とともに発展してきたといわれている⁶⁾。その後、石燈籠が庭園に用いられるようになると、庭の重要な構成要素となった。庭園の石燈籠は、庭を鑑賞するために必要な照明器であり、兼ねて景としての役割を持つようになった⁶⁾。日本では庭園の多くに燈籠が配され、庭園の重要な要素であり、また庭園そのものを価値づける役目を果たしている¹²⁾。江戸から明治時代にかけて活躍した勝元鈍穴の庭園様式が発展し鈍穴流として継承され、嘉兵衛の石燈籠が庭園や私邸の庭に据えられていることが分かっている⁴⁾。

(3) 目的

本研究では、滋賀県大津市、東近江市、長浜市、彦根市および京都府京都市において、西村嘉兵衛の代表的な石材加工品である蓮華寺燈籠と奥の院燈籠を調査し、石材業者や所有者への聞き取り調査をもとに嘉兵衛作の石燈籠を判定する。さらに嘉兵衛作の2種類の石燈籠の寸法、各部の割合、彫刻された文様を比較分析することで、その形態的特徴、類似点と相違点を捉え、嘉兵衛の職人技を明らかにすることを目的とする。また、近代から現代にかけての石燈籠の価値を再評価するとともに、定量的データにより嘉兵衛作の燈籠の判定方法を探る。

(4) 調査手法

本調査は、当代の西村家が保管していた大正元年から昭和35年までの嘉兵衛の「石材売上帳」³⁾に記載されていた顧客情報および本研究で対象とした全ての燈籠の所有者への聞き取り調査をもとに、嘉兵衛作の燈籠を探索し確定する調査を行った。調査対象は主に湖東地域の近江商人や庄屋などの私邸の庭および嘉兵衛の居住地であった大津市南小松地区の私邸の庭とし、愛知郡(1回)、東近江市(3回)、長浜市、彦根市、大津市、京都市(各1回)の計8回を、2021年3月26日から7月14日の間で実施した。

現地調査は6地域の34ヵ所にて実施し、47個の石燈籠を調査

*京都大学大学院地球環境学会

**京都大学大学院地球環境学堂

表-1 調査対象とした燈籠の所在地とその点数

所在地 市/郡・町/区	場所 コード	場所	蓮華 寺	奥の 院
愛知郡	愛町庄 E1	住宅	1本	
東近江 市	長勝寺 H1	石材店	1本	
	五個庄 H2	住宅	1本	
	五個庄 H3	石材店	1本	
	五個庄 H4	住宅	1本	
	五個庄 H5	住宅	1本	
	五個庄 H6	住宅	1本	
	五個庄 H7	住宅	1本	
	能登川 H8	住宅	2本	1本
	能登川 H9	住宅	1本	
	僧坊 H10	住宅	1本	1本
	柴原南 H11	住宅	1本	
	建部上中 H12	住宅		1本
	建部上中 H13	住宅	1本	
	建部上中 H14	住宅	1本	
	横葺 H15	住宅	2本	1本
彦根市	市元 HK1	石材店	1本	
長浜市	南高田 N1	旅館	1本	1本
大津市	南小松 M1	住宅		1本
	南小松 M2	住宅	1本	1本
京都市	上京区 K1	旅館		1本
	北区 K2	石材店		1本
合計		22所	20本	9本

表-2 蓮華寺燈籠の設置場所、石色、寸法と文様

単位 cm

所在地 市/郡	場所	燈籠 コード	石色	燈籠 寸法 ¹⁾	火袋 下区 幅	基礎 以外 高	中台文様	基礎 文様	
愛知郡	住宅	RE1	薄茶	六尺	17	177	鳳凰と瑞雲	不明*	
東近江 市	石材店	RH1	薄茶	六尺	17.5	167	鳳凰と瑞雲	格狭間	
	住宅	RH2	薄茶	六尺	16.5	174	菊	格狭間	
	石材店	RH3	白/薄茶	六尺	17	162	鳳凰と瑞雲	格狭間	
	住宅	RH4	薄茶	六尺	17	167	菊	格狭間	
	住宅	RH5	薄茶	六尺	17	164	鳳凰と瑞雲	格狭間	
	住宅	RH6	薄茶	六尺	17	170	菊	格狭間	
	住宅	RH7	薄茶	六尺	17	174	花菱	格狭間	
	住宅	RH8-1	薄茶	六尺	16	167	鳳凰と瑞雲	格狭間	
		RH8-2	薄茶	六尺	17	168	菊	格狭間	
	住宅	RH9	薄茶	六尺	16.5	162	菊	不明*	
	住宅	RH10	薄茶	六尺	17	173	鳳凰と瑞雲	格狭間	
	住宅	RH11	薄茶	六尺	17	173	菊	格狭間	
	住宅	RH13	薄茶	六尺	17	180	菊	格狭間	
	住宅	RH14	白/薄茶	六尺	17	176	菊	格狭間	
	住宅	RH15-1	薄茶	六尺	16.5	179	蓮華青草	不明*	
		RH15-2	薄茶	六尺	17	169	菊	格狭間	
	彦根市	石材店	RHK1	薄茶	六尺	16.5	176	菊	格狭間
	長浜市	旅館	RN1	薄茶*	六尺	17	171	鳳凰と瑞雲	格狭間
大津市	住宅	RM2	薄茶	六尺	17	177	菊	格狭間	

*RA1, RH9, RH15-1の基礎は地中に埋められている。**火袋の石は破損のため異なる石が使われている。

対象とした。石材売上帳によると、蓮華寺燈籠が最も多く販売され、次いで奥の院燈籠であった。本研究の対象は嘉兵衛作の石燈籠と特定された蓮華寺燈籠 20 本と奥の院燈籠 9 本である。表-1 に調査対象とした石燈籠の設置地域・場所および石燈籠の種類とその本数を示す。

嘉兵衛燈籠の特定には、嘉兵衛の石材売上帳に記載された販売先情報を基に、大津市南小松地区の石材業 A 氏 (60 代) が現地調査に同行し、石燈籠の 1) 石質, 2) 形態, 3) 加工技術を確認した。さらに、石燈籠の所有者への聞き取り調査にて所有者の製作者に関する認識および評価を確認した。A 氏は南小松地区の石材業の 3 代目であり、庭園や宿泊施設などの石材加工を行っている。

次いで、A 氏の指導の下、現地にて燈籠のすべての部位において実施した寸法の詳細な実測調査 (鉄製とビニル製巻尺による直接計測および写真・ビデオ撮影と 3D スキャナー (Polycam-LiDAR & 3D Scanner)) によるデータに基づいて、AutoCAD (以後、CAD) を用いて各燈籠の詳細図面を作成し、石燈籠の 1) 寸法, 2) 各部の比率, 3) 彫刻された文様を比較した。石燈籠の部位や彫刻の文様に関しては、福地謙四郎著「日本の石燈籠」¹⁴⁾を参考にした。また、A 氏に加え、近江八幡市の石材工業 B 氏 (80 代)、東近江市の造園業 C 氏 (70 代)、日野町の骨董収集業 D 氏 (70 代) への聞き取り調査を 2020-2021 年¹⁵⁾にかけて行い、嘉兵衛燈籠の技術的および美観的特徴を確認し分析時に参考とした。

2. 嘉兵衛作蓮華寺燈籠の特徴

(1) 蓮華寺燈籠の概要

蓮華寺燈籠は六角形燈籠の一種で、葺手が無く、基礎反花の蓮弁が線だけで表現されていることから基本型変化燈籠⁶⁾と分類されている。笠は瓦葺きの屋根を模したとされ、九重となっている。蓮華寺燈籠の本歌は、京都市上高野の蓮華寺の本堂前に置かれた一対であるとされ⁵⁾、最も特徴的なのは唐傘をすぼめたような形で背が高く、「下端には地樋は略式に、飛簷極を疎極にして一本宛刻み、隅木も作っている」⁶⁾と手がかかっているとされる (写真-1)。表-2 に研究対象とした蓮華寺燈籠の設置地区・場所、大きさ、石色、中台と基礎の文様を示す。燈籠の設置場所は私邸の庭 (14 か

所)、石材店 (3 か所) および旅館 (1 か所) の合計 18 か所であった。対象とした蓮華寺燈籠は 20 本である。

(2) 石質

石質としては、18 本がいわゆる嘉兵衛の特山から採取できた薄茶色で糠目 (細粒) の「赤石」と呼ばれるもので、2 本は一部に白色で黒雲母が多い粗目花崗岩が用いられていた。A 氏および C 氏への聞き取り調査によると、この薄茶色が石燈籠に温かみを与える効果があり、嘉兵衛燈籠の大きな特徴であるという。

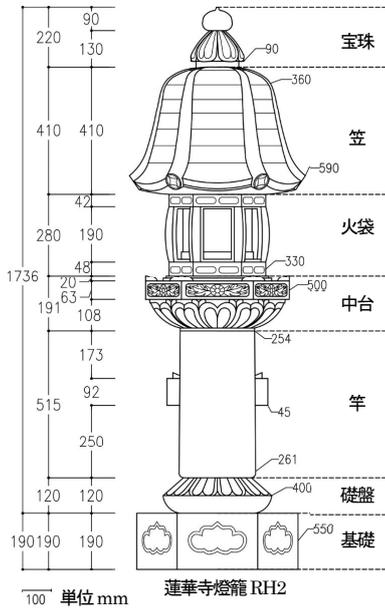
(3) 形態的特徴

ここでは目視および CAD 図面による分析結果を述べる。嘉兵衛作の蓮華寺燈籠は、上から宝珠、笠、火袋、中台、竿、礎盤、基礎の 7 つの部位によって構成される¹⁴⁾。宝珠から基礎まで全体が実測可であり、各部位の状態が最も良い RH2 の見取り図を示す (写真-1, 図-1)。各部分を詳細に確認すると、様々な特徴がある事が分かった。最も特徴的なのが笠、火袋、竿の部分である。

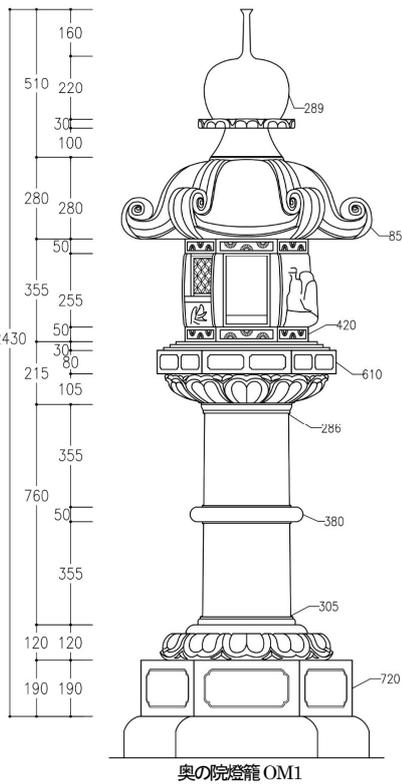
笠の形は本歌に同じく瓦葺き屋根を模倣した九重であるが、大きな違いは唐傘をすぼめたような形というよりは上部に張りが強丸みがあるのが特徴的である (写真-2a)。また上部から先端までは流れるような曲線と広がり、また下部に反りがあるのも本歌とは異なり独自性がある。また、丸瓦を模した先端には蓮華紋が彫られている (写真-2b)。調査した蓮華寺燈籠の瓦屋根の幅や蓮華紋はすべてほぼ同じであった。

火袋は六方向に開かれており、石材業 A 氏および B 氏への聞き取り調査によると、湖西地方で製作される燈籠の火袋の柱には特徴的なむくりがあり、両端から中央に向かって徐々に外側に膨らんでおり、その加工には高い技術が必要とされる (写真-2c)。これは、一回り大きな石を用意する必要があり加工の手間もかかるが、格調高く優雅に見えるための意匠的な工夫だという。また、すべての火袋の上下区 (高さは 4-4.5cm) には丸みを帯びた長方形の文様が施されていた。

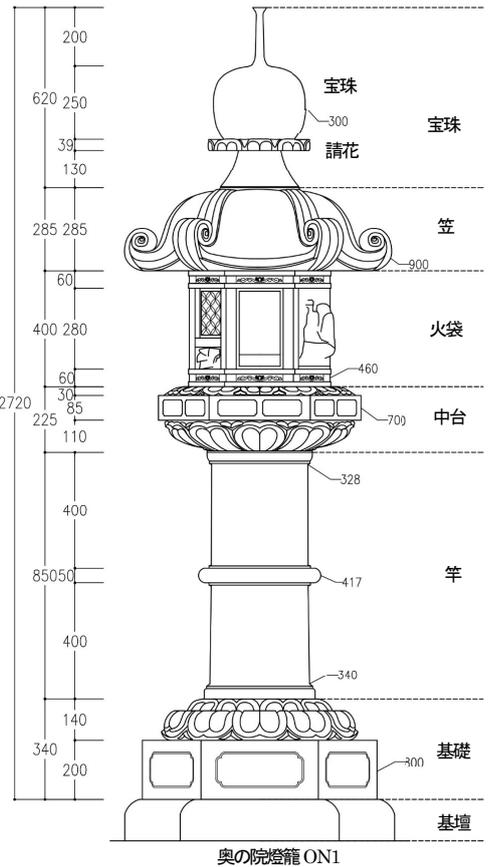
竿の中央部分に貫が付けられているのは、嘉兵衛作の蓮華寺燈籠の形態的特徴の一つである。竿と貫はつなぎ合わせるのではなく、一枚の石を削り出す手法で作られている。貫の上部には楔 (くさび) があり、貫の押さえを表現しており、この部分も一体である



図一 蓮華寺燈籠の見取り図



奥の院燈籠 OM1



奥の院燈籠 ON1

表一 蓮華寺燈籠各部の寸法と比率 寸法単位 cm

各部	径		高	
	寸法	比率	寸法	比率
宝珠	9-10.8	14%-17%	19.5-24	31%-39%
笠	59-64	100%	40-42	62%-69%
火袋	32-35	52%-56%	27-29.5	42%-48%
中台	49-52	78%-85%	16-19	25%-32%
竿*	26-27.3	41%-45%	50.5-52	78%-87%
礎盤	40-42.6	65%-69%	11-15	18%-24%
基礎	53-55	89%-93%	19-22	31%-37%

*竿の径は下部の数値を用いる。

表二 奥の院燈籠各部の寸法と比率 寸法単位 cm

各部	径		高	
	寸法	比率	寸法	比率
宝珠	23~38	33%-34%	40~67	58%-69%
笠	63~115	100%	20~32	28%-33%
火袋	31~60	48%-52%	27~53	42%-46%
中台	48~91	72%-79%	16.5~33	25%-29%
竿*	22.6~44.5	35%-39%	55~114	84%-99%
基礎	54~103	85%-90%	22.5~41.5	35%-38%

*竿の径は下部の数値を用いる。

表三 奥の院燈籠の設置場所、石色、寸法と文様 単位 cm

所在地	場所	燈籠コード	石色	燈籠寸法 ¹⁾	火袋下区幅	全体高	火袋形態	基礎文様
東近江市	住宅	OH8	薄茶	六尺五寸	17	196	むくり	格狭間
	住宅	OH10	薄茶	六尺	15.5	181	むくり	兎と波1波5
	住宅	OH12	薄茶	八尺	20	230	むくり	兎と波1波3*
	住宅	OH15	薄茶	九尺	23.5	270	むくり	兎と波3波3
長浜市	旅館	ON1	薄茶	九尺	23	272	直線	兎と波3波3
大津市	住宅	OM1	薄茶	八尺	21	243	むくり	兎と波1波5
	住宅	OM2	薄茶	八尺	20.5	239	むくり	兎と波3波3
京都市	旅館	OK1	薄茶	十一尺	30	345	直線	兎と波6
	石材店	OK2	薄茶	十尺	25.5	分解	直線	兎と波1波5

*H-15の基礎2つ側面は地中に埋められている。

ことから、その加工には技術を必要とする(写真-2e)。貫の大きさは外側に4.5-5cm凸、高さ9-10cm、幅約6cmであった。また、貫部分はすべての燈籠において竿のほぼ中央に位置していた。

本歌の蓮華寺燈籠には貫は無く、また燈籠製作で知られる京都市北白川や岡崎市で製作されたものは貫穴で表現されている。南小松地区に居住する他の石工の作品でも同じ形状の貫が用いられており、南小松地区で発達した形態である可能性が高い。

この他にも、宝珠は宝珠と請花の2つの部位に分かれているように見えるが実際には繋がっており一体である。中台の上端には蓮の形を模したような隅飾がある(写真-2f)。竿の部分に注目すると、竿の直径は上部が24-26.1cm、下部が26-27.3cmであり、

上部が平均で約1.2cm細くなっているが、視覚的には真直ぐな円錐に見えるが実際には下部をやや太くすることで安定感を持たせている工夫がなされていると推察できる。さらには、宝珠、中台、礎盤の蓮弁はすべて複弁の文様であるが、その彫り方はそれぞれに異なっている(写真-2g, h)。例えば、中台の蓮弁には膨らみがある一方、礎盤の蓮弁は比較的平坦な彫り方となっている。また、基礎の部分は六角型で側面には格狭間の文様が彫られている。

燈籠の笠の上下部、火袋、中台に多くの特徴的な加工や彫りが施されているが、中台から下部がシンプルな造形に仕上げられていることで、燈籠上部が強調されながらも全体のつり合いの取れた燈籠となっている。

蓮華寺燈籠は、庭の中でも比較的座敷に近い位置に配置されていることが分かった。これは蓮華寺燈籠の大きさが中程度であり、かつては実際の照明機能を有していたことによると考えられる。

(4) 寸法と各部の比率

図-1 に蓮華寺燈籠の各部の実測結果を再現した CAD 図面 (RH2) を示す。全体の高さは193cm、宝珠が22cm、笠が41cmで、笠の直径は上部が36cm、下部が59cmで厚みは約3cmであった。火袋の高さは28cm、火袋の柱の上下端の幅は約3cm、中央は約3.5cm、開口部は約9.5cm×17cmであった。竿の高さは51.5cmで直径は25.4-26.1cmであった。礎盤の高さは12cmで直径は40cm、基礎は高さ19cmで一辺の幅が27.5cmであった。

火袋の横一辺の寸法はすべて16cm-17.5cmで、全体の高さは162-180cm (宝珠の一部破損のため実測出来ないものは除く)であった。詳細実測調査を行った20本すべての蓮華寺燈籠は六尺として製作されたと考えられる。嘉兵衛の石材売上帳にも蓮華寺高さ六尺との記載があり、整合性が確認できた。

表-3 に20本の燈籠の各部の寸法と比率を示す。蓮華寺燈籠の各部の比率は、笠の横の長さを100%に設定した場合¹⁰⁾、各部の直径の平均は、宝珠15%、火袋は56%、中台82%、竿44%、礎盤67%、基礎89%であった。また、また各部の高さの平均は、宝珠35%、笠66%、火袋47%、中台29%、竿84%、礎盤21%、基礎34%であり、高さは285%であった。詳細な実測調査の結果、調査した20本の蓮華寺燈籠における各部の径の差は1.3-5cm、また、比率の差は3-7%であった。また、各部の高さの差は1.5-4cm、比率の差は6-9%の差であり、ほぼ同一であることが分かった。

CAD 図面によって、燈籠全体のバランスや各部の詳細な寸法や比率を確認でき、これまでの視覚的および定性的な判断に加え、より詳細なデータに基づき定量的に嘉兵衛作の蓮華寺燈籠を特定することが可能となった。石材業 A への聞き取りによれば、かつては燈籠の各部の長さや比率は各家の秘密とされ、弟子になっても簡単には教えてもらえなかったという話を父親や先輩の石工からの口伝にて聞いていたという。今回の調査ですべての蓮華寺燈籠の大きさや比率がほぼ同じだったことから、嘉兵衛作の蓮華寺燈籠を定量的にも特定できる可能性が高まったといえる。

(5) 彫刻された文様

調査を行ったすべての蓮華寺燈籠では石質、大きさ、各部の比率がほとんど同一であったが、中台の文様には違いがあることが分かった。表-2 と写真-3 に示すように、菊 (あるいは牡丹) 11 (写真-3a)、鳳凰と瑞雲 7 (写真-3b, c)、花菱 1 (写真-3d)、蓮華唐草 1 (写真-3e) 本であった。興味深い点は、ひとつの燈籠の中台に彫られた花の文様は花や葉の彫りがすべて同じではないことである。例えば、写真-3a の RHK1 の菊文様では、花や葉の形が六面それぞれ少しずつ異なっており、嘉兵衛の工夫が見て取れる。

このように、嘉兵衛作の蓮華寺燈籠には滑らかな表面の加工と全体的なバランス、緻密な彫りや文様の多様性など、多くの特徴が見いだされる。これは火袋や竿の貫に見られるような高い加工技術と嘉兵衛の創意工夫によるところが大きいと推察される。

3. 嘉兵衛作奥の院燈籠の特徴

(1) 奥の院燈籠の概要

奥の院燈籠は六角形燈籠で、その本歌は、奈良県春日大社の奥の院という紀伊社の横に設置されている燈籠であることが知られている¹⁴⁾。奥の院燈籠は春日燈籠の進化型とされ、春日燈籠と共通点が多いが装飾がより複雑である。特に、中台の十二支文様が特徴的であるが、本歌は走り獅子であり、本調査で確認した限りでは、いつから十二支文様が一般的になったかは分からなかった。しかし、他の燈籠と比較しても火袋や中台の装飾が大きく豪華であることが最も際立った特徴である (写真-4)。

表-4 に研究対象とした奥の院燈籠の設置地域・場所、火袋の下部幅と全体の大きさ、寸法、石色、火袋の形、基礎の文様を示す。燈籠の設置場所は私邸の庭 (6 か所)、旅館 (2 か所) および石材店 (1 か所) の合計 9 か所であった。対象とした奥の院燈籠は 9 本である。

(2) 石質

9 本すべてに薄茶色の細粒花崗岩が使用されていた。石材業 A 氏や B 氏によると、嘉兵衛燈籠の特徴として、この石質により燈籠の接着面 (合場) の密着度を高くすることが出来、それが各部位を組み合わせて作られている燈籠に安定性をもたしている。また、細粒の硬い花崗岩であることから屋外に設置されていても劣化が少なく、製作当時と変わらない形状や彫刻を維持することにもつながっている。

(3) 形態的特徴

ここでは目視および CAD 図面による分析結果を述べる。嘉兵衛作の奥の院燈籠は、宝珠 (宝珠と請花)、笠、火袋、中台、竿、基礎および基壇の 8 つの部位によって構成されている¹⁴⁾。通常、宝珠と請花は一体で作られるが、西九州地域では宝珠と請花が別の石で作られていることが特徴である。基壇は地中に埋められていることが多く、今回の調査では対象にしないものとした。

嘉兵衛作の奥の院燈籠の特徴が最も表れているのが宝珠、笠、火袋、中台である。「図典 石塔と石灯籠」¹⁷⁾に示されている奥の院燈籠の見取り図に比べても宝珠は大きく上部に膨らみがあり、特に宝珠の先端は直径が約 5cm で長さが約 20cm もあり、聞き取り調査を行ったすべての対象者が、その細く長く延びた先端が嘉兵衛の奥の院燈籠の特徴であり、加工技術の高さが示された象徴的な形をしていると評している。宝珠の先端部分の長さは大きさによって 16-20cm もある (写真-5a, b)。嘉兵衛の奥の院燈籠の特徴であり、垂直方向の視覚効果が強調され、石材加工の高度な技術を必要とした。

笠は屋根の流れや振り棟に軒反りがある。軒口の厚さは薄く、二重の段型である。調査によると、OM1 と OM2 の八尺奥の院の笠の軒口の厚さは 3cm で、OH15 と ON1 の八尺奥の院は約 3.3cm であった (写真-5c, d)。加えて、十一尺の奥の院 (OK1) の笠裏には垂木が施されている (写真-5d)。垂木の幅は 2.5cm で垂木の間隔は 4cm、垂木を除く笠の厚みは 5cm である。

笠のもう一つの特徴である蕨手は、燈籠の大きさに関係なく丸く巻かれた線が彫られている。笠と蕨手の間は深くまで彫り込まれていることが特徴的である (写真-5e, f)。他の奥の院燈籠と比較すると、笠の軒口が薄く反り返った形状や笠と蕨手の間の深い彫りに、嘉兵衛の巧みな職人技が表れている。

火袋は 6 面で設計されており、表と裏は火口として開いている。火袋の形状には、直線型とむくり型の 2 種類があり、OK1, OK2, および ON1 は直線型で、他の 6 本はむくり型であった (表-4)。2 面に施された格子の幅は小さく、加工技術が窺える。例えば、写真-6 に示すように、OK1 の格子の幅は 1cm である。火袋の上下区に彫られた文様は、どれも上下同じで、菊が 5、蓮華唐草 2、連子が 2 本であった。

また、その他にも竿は真直ぐ伸び中央に中節があるが、竿の下部の直径は上部よりわずかに大きい。宝珠の請花、中台の蓮弁と基礎の反花は複弁であり、すべて膨らみがある彫りとなっている (写真-7)。また、OH15, OK1, ON1 の火袋と接着する中台の上部には複弁の花が彫られたものと、他の 6 本は階段状の加工がなされていた (図-2)。基壇も六面あり緩やかな曲線の加工がなされているなどがある。

奥の院燈籠の特に大型のものは、座敷から離れた庭の中央に配置されている場合が多いことが分かった。

本研究で対象とした全ての燈籠の所有者に対する聞き取りによ



写真-1 蓮華寺燈籠本歌(左)とRH2(右)



写真-2 蓮華寺燈籠各部



写真-3 蓮華寺燈籠の文様



写真-4 奥の院燈籠 ON1

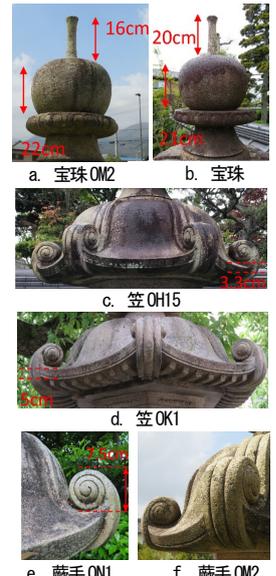


写真-5 奥の院燈籠宝珠と笠



写真-6 奥の院燈籠火袋 OK1 (上)と ON1 (下)



写真-7 奥の院燈籠複弁 OK1

写真-9 奥の院燈籠基礎の文様 OK1



写真-8 奥の院燈籠中台十二支

ると、嘉兵衛作の燈籠である事を認識しており、「父親から嘉兵衛燈籠だと聞かされていた」、「高価なもので大事にしていた」また、本人が購入した場合は「嘉兵衛作の燈籠だと分かっている購入した」など、嘉兵衛の名が湖西および湖東地域で知れており、その価値も認識されていたことがわかった。

(4) 寸法と各部の比率

図-2 に本調査で最も多い大きさであり、宝珠の尖端や火袋に

破損や修理の跡がなく、また基礎が地中に埋まっておらず全体の実測が可能であった奥の院燈籠 2 本の各部の実測結果を再現した CAD 図面 (OM1 と ON1) を示す。ここでは本調査で最も多い八尺の奥の院燈籠 OM1 を事例とし、各部位の寸法を以下に示す。全体の高さは基礎を除き 243cm、宝珠 51cm、笠 28cm で笠下部の直径は 85cm、軒口の厚み 3cm であった。火袋の高さは 35.5cm、火袋の竿上下端の幅 3cm、中央は 3.5cm、開口部は 13cm×23cm

であった。竿の高さは72cm、直径は28.6-30.5cmで、基礎は一边が高さ19cmで幅が36cmであった。

調査を実施した9本の奥の院燈籠はそれぞれ、六尺(1本)、六尺五寸(1本)、八尺(3本)、九尺(2本)、十尺(1本)、十一尺(1本)と6つの異なる大きさがあつた。表-5に示した奥の院燈籠の各部の寸法と比率から分かるように、大きさの異なる燈籠であっても基本的には竿以外の部位はほぼ同じ比率で、竿の部分の比率を2つに分類することが出来た。笠の長さを100%とすると、各部分の直径は宝珠(宝珠34%、請花39%)、火袋50%、中台75%、竿37%、基礎87%であり、高さは平均で宝珠(全体)62%、笠31%、火袋43%、中台27%、竿87%と96%、基礎36%、全高は291%であった。例えば、竿の比率が大きいのはOH15、OK1、ON1の96%であり、その他5本の燈籠は87%であった。

(5) 彫刻された文様

火袋の火口の右側面には、虎、鶴、鹿、仙人の彫刻がなされている。対照的に左側面の上部は格子となっており、下部には虎、鳥、花、人参などが彫られている(写真-6)。その文様は多様であり、製作者の工夫が感じられる。

奥の院燈籠の中台に彫られた十二支を比較すると様々な種類がある事が分かった。丑、寅、辰、巳、午、未、亥が一体のみの彫刻であるのに対して、子、卯、申、酉、戌は一体または数頭の場合もあつた。さらに、十二支の彫刻は非常に精巧で鮮やかで、動物の目や歯など表情がはっきりと確認できる(写真-8)。石材業B氏によると、他の彫刻に比べると適度な厚みで大き過ぎず立体的である。

基礎には格狭間の文様が多く使われるが、嘉兵衛作の奥の院には、因幡の白兔の逸話を参考にした文様が施されている。例えば、OK1では、6つの面すべてにウサギが彫られているが、その他の燈籠では1-3面にウサギが、その他の面には波が彫られている(写真-9)。また、これらを囲む縁には単一線または二重線が施されており、二重線の方が多く確認できた。

4. 考察

本来比良山系から産出されるのは白色の粗目花崗岩であったが、嘉兵衛の持ち山が硬質の細粒花崗岩の地質であったことから「赤石」と呼ばれる雲母が少ない石材を使用することができた。このため、燈籠表面のスムーズな加工や緻密な彫刻が可能であった。

燈籠の大きさは蓮華寺燈籠に関してはすべて六尺で各部位の比率もほぼ同一である一方、奥の院燈籠は五尺五寸から十尺まで異なる大きさがあつた多様であるが、各部位の比率は竿を除きほぼ同一であった。この結果から定型があつたと推察でき、嘉兵衛作燈籠の特定可能性を見出すことができた。

嘉兵衛の製作した燈籠には、他地域の石工が製作した燈籠とは違う特徴があり、顕著なものは蓮華寺燈籠の笠の形状や貫と楔、奥の院燈籠では、宝珠の細く長い先端、笠と蕨手の間の深い加工、火袋のむくり等がある。これに加え、各部の割り付けなどに全体のバランスを追求し創意工夫がなされていることが、専門家への聞き取り調査の結果や同類の燈籠見取り図との比較により明らかになった。また、火袋の仙人や中台の干支などの細かな彫刻、異なる文様などから、常に創意工夫がなされていたことや当時の石材加工の高さが伺える。

これらから嘉兵衛燈籠は、使用していた石質により燈籠の接着面(合場)の密着度が高く安定性を持ち、屋外に設置されているにも関わらず劣化が少ないことによることを明らかにした。また蓮華寺燈籠に示されるような本歌とは異なる独自のスタイルがあり、燈籠全体の割り付けと各部位の緻密さにみられる高い加工技術で作られる文様により、装飾品としての価値も有していたと考えられる。

5. 結論

本研究では、滋賀県大津市南小松地区出身の名工と称された西村嘉兵衛が製作した蓮華寺燈籠20本と奥の院燈籠9本の詳細な実測調査を石材業者の協力を得て実施し、CAD図面をもとに各部の寸法、比率、図柄の特徴等の分析を行った。また、燈籠の目視や聞き取り調査をもとに、石質の確認や石工の職人技を明らかにした。

嘉兵衛が製作したと確定できた蓮華寺燈籠は、ほとんどが薄茶色がかつた硬質の細粒花崗岩を用いた六尺の大きさであった。調査したすべての燈籠において各部の比率はほぼ同一であることが確認できた。また、嘉兵衛特有の形態的特徴を笠、火袋、竿の貫等に見出すことができること、さらに、中台の文様には多様性がある事を明らかにした。

奥の院燈籠は、すべての燈籠に薄茶色の細粒花崗岩が使用されており、多様な大きさが確認された。一方、燈籠の各部の比率は竿を除いてほぼ同一であり、竿は長さによって2つに分類できることを明らかにした。奥の院燈籠の特徴は、宝珠の先端の長さや細さ、笠の曲線、軒口の反りと薄さ、笠と蕨手接着部分の深い彫り、火袋の文様の多様性、火袋の格子の細さと美しさ、竿の真直ぐな伸び、連弁や請花の膨らみのある加工などである。また、中台の十二支の文様には多様な種類や工夫を確認できた。

嘉兵衛作燈籠は、石質によって可能となる滑らかで細かい加工、各部の割り付けのバランス、各部の精巧な彫刻など高い職人技と独自性の追求によって生み出されていると推察できる。

さらに、滋賀県や京都府京都市内の石材業者や造園業者だけでなく、燈籠の所有者の一部も明治から昭和初期に活躍した西村嘉兵衛作の燈籠の高い技術と美しさを認識しており、嘉兵衛燈籠の価値が高く評価されていたことが分かった。

謝辞: 調査に御協力頂いた平出直厚氏及び関係者の皆様に深謝致します。本研究は、人間文化研究機構総合地球環境学研究所のプロジェクト番号14200103の一環として行った。

補注及び引用文献

- 1) 平出直厚(2002): 近江の燈籠(その1): しゅうけい 滋賀 NO. 83, 11-12
- 2) 特定非営利活動法人まちづくり役場(2014): なかまのお庭(第3号), 24
- 3) 西村家および関係者が保有していた大正元年から昭和35年までの「西村嘉兵衛 石材売上帳」より
- 4) 近藤三雄・山村文志郎・山村真司(2019): 私伝・鈍穴流「花文」の庭: 誠堂新光社, 278-323
- 5) 天沼俊一(1933): 石燈籠: スズカケ出版部昭, 2-132
- 6) 川勝政太郎(1984): 燈籠・手水鉢: 誠堂新光社, 1-147
- 7) 西村金造(1991): 西村金造作品集: 毎日新聞社, 146-189
- 8) 特定非営利活動法人まちづくり役場(2013): なかまのお庭(第2号), 13-35
- 9) 平山勝藏(1960): 庭燈籠の形態的特異性について: 造園雑誌24(2), 31-36
- 10) 平山勝藏(1961): 春日灯籠および類形灯籠の形態的特徴について: 造園雑誌25(3), 28-32
- 11) 瀬川欣一(2001): 近江石の文化財: サンライズ出版, 273-275
- 12) 龍居庭園研究所(1992): 石燈籠の話: 建築資料研究社, 24-25
- 13) 通常、燈籠の寸法は寸法法が用いられている。センチメートル法での実測では部分的な破損等により詳細寸法が多少異なる。ここに示す燈籠寸法は呼び寸法である。
- 14) 福地謙四郎(1985): 日本の石燈籠: 理工学社, 89-302
- 15) 聞き取り調査実施日: A氏: 2020年10月, 11月, 2021年1月, 7月, 12月, B氏: 2021年10月, C氏: 2020年12月, D氏: 2020年10月, 2021年10月
- 16) 塚本嘉一(1972): 日本の美石製品のみちるるべ: 岡崎石製品工業団地協同組合, 6
- 17) 塚本嘉一(1980): 図典 石塔と石灯籠: 鎌倉新書, 44-74

(2021.9.25受付, 2022.3.30受理)